慈眼寺たより

第16号
平成26年7月
春日井市下市場町
「慈眼寺」
電話　81‐6801
編集　伊藤秀文

☆我が家の山神さま★

伊藤博康

私の家には、私が生まれて以来ずっと山神さまがあります。父親もいつからあったとは知らないようでした。このことから少なくとも百年以上前に存在していたものと思われます（写真）。

山神さまについてもう少し深堀したくなり、平成十年発行の「下市場誌」をひもといて調べたところ、六十五頁の村絵図に山神さまが（沢渡池の東の水の取り込みあたり）記されていました。古い記憶では確か水神さまと記憶していましたため、現地を探してみましたら沢渡橋から旧十九号線まで伸びる遊歩道の中間に、竹笹に隠れて山神さまの石碑がありました（写真）。

さらに南五十メートルの貯水池の南東角には、水神さまが区画整理事業の中で新しくなった石碑がありました。

どうやらこの神さま群は何かのつながりがありさらに詳しく調べたくなって、春日井市の図書館で見つけた「春日井の文化財（春日井市発行）」をひもといてみました。この誌から引用してみると、もともと田の神と山の神は一体のもので、山の神は春に山から下って田の神となられ、秋の収穫が住むと再び山へ帰って、山の神になられるといわれている。山の神の祭りは旧暦の二月と十月で、神を迎え送るものである。山の神は市内一円に分布していて、大字に一か所のところもあれば島ごとに祀っているところもある。田の神としての祭りは取り立てて行わないが、苗代の水口にススキの穂や樫の柴をさして依代としているのを見かける。ここで田の神は、稲の発育や豊作を見守ってくださるのであろう。

水の神も稲作と深い関係にあり、川や池の堤防や用水の取り入れ口に祀られている、などと書いてありました。

ここで今まで聞いたこともない田の神が出てきました。同誌に、坂下の八幡社にあるとのことでしたので、行って探してみました。その境内には山神、水神、田神の石碑が雑然と合祀されていました。おそらく地区のあちこちにあった石碑を寄せ集めたのだと思われます（写真）。

我が家の山神さまはもともと背丈ほどの築山にあって、屋敷の前には小川と水田がありましたので「春日井の文化財」の説明にありました島単位の山神様としてあったものではないかと勝手に考えております。

お盆のお知らせ

① 棚経の日取り

八月十日　熊野、神領方面
八発十一日　穴橋（県道東）
　　堀北
八月十二日　浅山、鳥居松
　　勝川、　名古屋
八月十三日　四谷、南部
八月十四日　下市場
八月十五日　穴橋、篠木、関田
　　上条、高蔵寺、坂下
　右は原則です。

② お施餓鬼

お施餓鬼は毎年八月十八日です。今年は月曜日です。七月一日から受付をしております。早い時間帯は予約済みになっております。ご希望の方はなるべくお早めにお申し込みください。電話で結構です。お布施は今までどおりで

初盆施餓鬼	五万円
特別大施餓鬼	三万円
大施餓鬼	二万円
合同施餓鬼	一万円

③ 精霊流し

八月十五日の午後四時半から慈眼寺の山門で行います。明るいうちにお持ちください。

☆ギクシャク★

最近、世の中がとてもギクシャクしているように思われてなりません。お互いに自分の主張ばかりして、人の言うことを聞こうともしないようです。

例えばウクライナ。自分たちの気に入らない大統領は、実力で引きずり下ろす。それにはそれなりの理由があったのかもしれませんが、今度は、引きずり下ろされた方が黙ってはいないでしょう。結局、どんどん泥沼に入っていき、ついには内戦ということになってしまいます。

確かに、未開の国では大統領＝皇帝くらいの感覚で、憲法無視でやりたい放題私腹を肥やす人も大勢いるようです。それでも最初に実力を行使すれば、相手方の実力行使に文句が言えず、そのうちに世界中の国から干渉されるような事態になっていきます。同じようなことが、エジプトでもシリアでも、イラクでも起こっています。単純に自分が正しいので相手に暴力を振るうことも許されると言い出せば、際限のない流血が延々と続くことになります。

これは、後進国に限らずアメリカなどでも同じでしょう。奴隷制度の是非をめぐって、白人同士が南北戦争を戦い、六十万人の戦死者を出したほど素直なアメリカ人たちです。その素直さでもって外国に民主主義を広めるために、外国に戦争をふっかけ挙句その国を無茶苦茶にしてしまうのもアメリカなのです。アメリカ流の民主主義が一番正しいという保証は何もありません。

韓国や中国は日本と領土でもめているようです。この風潮にのって、これらの国を中傷する言論が盛んになされていますが、こんなことでいいのでしょうか。これらの国は、二千年も前から付き合いの深い、かけがえのないお隣さんなのです。今こそ冷静に隣国と和を保つ事が大切では無いでしょうか。ということがどうして言えないのでしょう。

総理大臣は集団的自衛権などといって、これらの島の防衛戦に米軍を引き込んで行こうとしているのでしょうか。

《青柳歌壇・俳壇》

○正座して甘茶いただく檀那寺
○白き花多き我が庭春深し　　貴美子

○遠ざかるほどに見事な富士の山近くで観ても嶺は望めず
○我流だが六種の野菜育ちよし狭いながらも畑作楽し　　今井正

○ご当地に住みし六十余年
お寺参りや御詠歌に
苦しみの種も数々あれど
今はお茶や今昔話に花が咲き
山より高く海より深し
友　友　友よ　　千津

○名も知らぬ人の好意に助けられ今日のピンチを事なく終えり　　た

○羅（うすもの）の尼の袂に鈴鳴れり
○花うばらふるさとの川う痩せゐたり
○はらからと雑魚寝の仏間百合匂ふ
○ぼうたんへ吐息のごとき宵の風　　矢野孝子

○大般若読経の声の一線に
○大般若知恵を授かる良き日かな　　秀

★説法☆

住職　春日井浩道

今まで、この欄では「般若心経私見」（四号）、「修証義について」（八号）の二件だけがお寺の「たより」らしい記事でした。本当は、もっとそういう仏教のプロパガンダといったものを書かなければという気持ちがあるのですが、恥ずかしい話、仏教とは何かということが自分でもよくわからないこともあって、いつまでもためらっていました。

例えばキリスト教には聖書、イスラムにはコーランというものがあり、いずれもガチガチに固められています。ユダヤ教も聖書を使います。信者にはそこに書かれていることは真実であると信じて、神の意思に忠実に生きることが要求されます。そうした信者だけが救われるのです。

ところが仏教には、そういうお仕着せの世界観というものがありません。あるのは「諸行無常」「諸法無我」といった「すべてのことは時間とともに移り変わるものだ」「移り変わらぬ実体などありはしない」という言葉だけです。身も蓋もないほど単純で率直なのです。キリスト教は救いの宗教であり、仏教は悟りの宗教であるとよく言われますが、一体、「悟りの宗教」などというものがあるのでしょうか。「宗教」という言葉を「人がよりどころとする世界観」というくらいに広げないととても仏教は宗教とは言えないような気がします。とにかく仏教というのは「修行して自分で悟れ」というスタンスなのです。仏というのは悟った人という意味ですから、結局、修行のアカツキには、修行者の数だけ仏が出来上がるわけです。それがお釈迦様の本意だったのでしょう。結局、ありのままを見つめながら、自分なりの世界観を作ることというのが仏道のあり方のようです。教というより道といったほうがぴったりの感じです。こういう姿勢だったから仏教には、多くの分派と、星の数ほどの経典が出来上がりました。

前置きはこのくらいにして、今回から、説法を書いていきたいと思います。

といっても、悟りの中身は千差万別ですから、まずはもう一度「修証義」を引き合いにして具体的なところから入っていこうと思います。修証義は仏教原理主義者である道元様の正法眼蔵をコンパクトにまとめた曹洞宗の教義です。

最初に第四章「発願利生（ほつがんりしょう）」。これは、菩提心をおこした者（修行者）の取るべき実践について書かれています。その根本とするところは、人は個人では何もできない存在であることを前提に、常に世のため人のためを思って生活しなさいと言っています。自分の悟りよりも人の悟りを応援してやりなさいとまで言っています。しかしよく考えてみると、そんなことが出来るのは、既に悟りの境地にあると言わなければならないでしょう。悟りというのは、結局はうまく生きるための知恵だと思われます。だとすれば、仏道者として一番の眼目である自分の修行を後回しにして、人に協力してあげることは、何にもまして悟りの境地では無いでしょうか。不断にそういうことができることこそ、「悟り」なのです。諸行は無常なのですから、悟りという決まった状態があるわけではありません。早い話、机が一つしかなく受験生が二人いる場合には、相手に譲ってあげなさい。それができるのが悟りですよということです。それを生活態度にしていきましょうと。なかなか出来ることではありませんね。

さて、人のため世のためというのは四つの方法があるといっています。布施、愛語、利行、同事といいます。この分類にはいささか異議もありそうですが、とりあえずこれに沿って行きます。

まず、布施というのは寄付という意味です。今ではもっぱらお経の対価というふうに理解されていますが、もともとは自分にある力を人に回してあげることです。もともとはインドの言葉でダーナと言いました。今でもお金を出してくれる人のことを旦那と呼びますが、これは発音をそのまま漢字に置き換えた言葉です。それが広く施すという漢語に訳されて布施となったのです。共同体や世の中へ、自分の力を寄付していくことです。税金は強制的なものですから、自発的な布施とはすこし違うのかもしれません。でも本来は、自分たちの共同体の運営資金として拠出するものですから、布施と考えてもいいのかもしれません。

また布施の対象となるのは、財物といういわゆる金目のものに限らず、自分の知っている知識や技能でも構いません。子供のアイディアが国を救ったということもあるのです。それが少しでも役に立っていけばいいのです。布施という言葉の問題よりも、自発的に世の中に貢献できれば、それは楽しいことでは無いでしょうか。

今日は布施のところで終わってしまいました。次回は愛語から始めます。

暑中お見舞い申し上げます

檀方総代　伊藤辰男
〃　伊藤久幸
〃　伊藤秀文
〃　伊藤正廣
〃　大野和義
〃　大野悟
〃　木村廣孝
住職　春日井浩道

☆生活苦★

生来の面倒くさがりで、何事もなかなか進捗しない。もともと、生きるということは実に面倒なことだと思う。これは人間に限らず、生き物一般に言えることだ。植物だって、根を伸ばして水を吸い上げなければ死んでしまう。花も咲かせなければイカンだろう。花には蜜を用意しておかなければ、虫は花粉を運んでくれない。動物では、まず自分で餌を探さなければならない。その間、自分がほかの動物の餌になるのを防がねばならない。もちろん、餌も同じ理屈で動いているので、なかなかこちらの口には入ってくれない。もちろん餌に反撃されることだって大ありだ。餌だけではない。自分の子孫を残そうと思ったら（そんなことは考えてないかもしれないが）うまいこと異性に巡り合わなければならない。これがまた命懸けで熾烈な競争を伴う。うまくたどり着いても相手のご機嫌を損ねてはいけない。子供が生まれたらこれを養育、保護していかねばならない。こんなサイクルを死ぬまで繰り返すのである。

人間様になると、一層大変だ。さすがに自分の足で獲物を追いかけたりという苦労はなくなるが、その分ほかの作業が増える。勉強もしなければいけない。戦争で殺されないようにしなければならない。嫌な上司に叱られなければならない。強盗にあわないようにしなければならない。見栄を張らなければならない。親の介護をしなければならない。生きるためには嘘もつかねばならない。

水は高所から低所に流れる。これが自然の摂理だ。でも生きるということは水を低所から高所に流すような作業だ。労多くして面倒でないはずはなかろう。いったいどうしてこんな変なものが出来上がってしまったのだろう。そして、変化しながら増えていく。人間も未完成で発展途上なのである。

★編集後記☆

今年もあっという間に半年過ぎてしまいました。世相はギクシャクとして、あちこちで戦争の匂いがしています。イスラム絡みが多いようですが、ウクライナなどはそうでもないようです。人間は民族や宗教を超えて仲良くできないものなのでしょうか。そんなことは無いはずです。自分達の価値観が絶対だと思うのは困りものです。

江戸時代、甘酒は夏の風物詩の一つでした。現代では、甘酒といえば冬をイメージしがちですが、当時は暑気払いに飲む習慣がありました。俳句の世界では今日でも夏の季語となっています。

また、枇杷の葉を使った「枇杷葉湯（びわようとう）」も夏の定番の飲みものでした。江戸時代、夏の暑さに衰弱する老人や子供たちも多かったなか、甘酒や枇杷葉湯が、夏バテ防止の特効薬だったようです。

面白いことに、枇杷葉湯売りはカラスの絵、甘酒屋は富士山の絵を看板にしていました。カラスのマークといえば枇杷葉湯と江戸の庶民には認識されていたようです。暑くなりますのでお気を付けください。

「慈眼寺たより」第十六号
平成二十六年七月十日発行
ホームページ
←←
http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenji/